

## 哀歌3-5章「罪からの悔い改め」

### 1A 力強い真実 3

1B 自分を苦しめる主 1-20

1C 攻撃 1-14

2C 苦味 15-20

2B 滅んでいない憐れみ 21-45

1C 待ち望み 21-39

2C 尋ね調べ 40-45

3B 敵からの救い 46-66

1C 深い穴からの叫び 46-58

2C 敵への報復 59-66

### 2A エルサレムの零落 4

1B 飢え衰え 1-16

1C 一般の民 1-12

2C 預言者と祭司の罪 13-16

2B 滅び 17-22

### 3A 回復への叫び 5

1B 他国人の虐げ 1-18

1C 失われた権利 1-10

2C 奴隷生活 11-18

2B とこしえの御座 19-22

## 本文

哀歌3章です。私たちは前回から哀歌を読んでいます。ここはバビロンによって滅ぼされるエルサレムを悲しむ歌になっています。1章では、エルサレムを一人の女に例えて、彼女が頼っていたすべての物が剥ぎ取られていく様子をエレミヤは歌っていました。「私に慰める者がいない」という言葉が何度となく出てきましたね。ただ主のみしか、自分たちには残されていないように神がされているのです。2章では、バビロンによるエルサレム破壊は、まさに主ご自身の手によるものであることをはっきりと描いています。エルサレムの要塞、家々、宮殿、神殿を、主ご自身が打ちつけておられることが書かれています。神殿が破壊されているのは、主がおられないから、主が生きてもおられないからではなく、むしろ主がおられることを証ししていたのです。

そして3章に入りますが、神がエルサレムに下している災いを、自分の体に受けているエレミヤの苦しみを描いています。これが預言者エレミヤの大きな特徴です。自分とエルサレムを一体化させているのです。バビロンは神の裁きの現われであると言いながら、その裁きを自分が受ける

ようにしているのです。これこそ、究極の執り成しの姿であり、パウロが同胞の民のために、「この私がキリストから切り離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。(ローマ 9:3)」と言ったことに通じます。そして何よりも、主ご自身が、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。(マタイ 27:46)」と祈られた、身代わりの苦しみを表しています。

### 1A 力強い真実 3

#### 1B 自分を苦しめる主 1-20

##### 1C 攻撃 1-14

3:1 私は主の激しい怒りのむちを受けて悩みに会った者。3:2 主は私を連れ去って、光のないやみを歩ませ、3:3 御手をもって一日中、くり返して私を攻めた。3:4 主は私の肉と皮とをすり減らし、骨を砕き、3:5 苦味と苦難で私を取り囲んだ。3:6 ずっと前に死んだ者のように、私を暗い所に住まわせた。3:7 主は私を囲いに入れて、出られないようにし、私の青銅の足かせを重くした。

エレミヤは、エルサレムのために祈っている時に、エルサレムの今の状態を、監獄の中にいるような状況として話しています。それが暗闇であり、そしてその中で鞭打たれるようにして、肉と皮をすり減らし、そして死んだ者のようになってしまっていて、青銅の足かせもはめられています。事実、これが罪を犯した時の私たち人間の状態であり、罪の中の監獄、暗闇の中の監獄にいます。

3:8 私が助けを求めて叫んでも、主は私の祈りを聞き入れず、3:9 私の道を切り石で囲み、私の通り道をふさいだ。3:10 主は、私にとっては、待ち伏せしている熊、隠れている獅子。3:11 主は、私の道をかき乱し、私を耕さず、私を荒れすたれさせた。3:12 主は弓を張り、私を矢の的のようにし、3:13 矢筒の矢を、私の腎臓に射込んだ。3:14 私は、私の民全体の物笑いとなり、一日中、彼らのあざけりの歌となった。

主が自分に対して敵対している姿です。祈りは聞かれません。そして自分の道をふさいでしまっています。そして熊や獅子のように自分を襲います。そして、自分を畑に喩えて、それを主は荒らされます。そして矢を自分の体に放ちます。そしてかつて、エレミヤはユダの民の物笑いとなっていました。エルサレムは、今は、周囲の国々の物笑いとなっています。

執り成しをしている、また執り成す心をもってこの地上を歩いているとこのようになってしまう時があります。そして主が先だって、執り成される方でした。まさに主は、ご自分が肉体を取られて、そしてその肉体にあって文字通りに、肉体を損なわれていかれたのです。十字架の上で、矢が脇腹に刺されました。そして、同胞の民の物笑いとなり、あざけりの歌となっていました。

##### 2C 苦味 15-20

3:15 主は私を苦味で飽き足らせ、苦よもぎで私を酔わせ、3:16 私の歯を小石で砕き、灰の中に私をすくませた。3:17 私のたましいは平安から遠のき、私はしあわせを忘れてしまった。3:18 私

は言った。「私の誉れと、主から受けた望みは消えうせた。」と。3:19 私の悩みとさすらいの思い出は、苦よもぎと苦味だけ。3:20 私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む。

エレミヤの心が苦々しくなっています。「苦よもぎ」は、ものすごく苦い草で、たくさん食べると精神的におかしくなる毒を含みます。主による辛酸を舐めているわけです。黙示録にも、神の災いの一つに苦よもぎによる水の汚染によって、人々が死に絶えることが予言されています(8:11)。そして「歯を小石で砕き」という表現は、パンをこねる時に石が混じってしまい、そのパンを食べて歯が欠けてしまった、という経験です。いかがでしょうか、私たちキリスト者がこの世を生きている時に、いつの間にかこころに苦々しさが心に満たされることがあります。人の罪や不法に対して、また自身にそれをどうすることもできないやるせなさを持って、思いが沈むのです。

私は、フェイスブックにおける二つの投稿を読んで落ち込んでいました。一つは、アメリカ人の宣教師によるもの、もう一つは日本人の牧師によるものです。「なぜ、日本にこれだけキリスト者が少ないのだろうか？」ということで、「これがいけないのだ、あれがいけないのだ」と原因を連ねていっています。そして、アメリカ人の宣教師のほうでは、「日本の牧師は、信者が弟子になるように訓練していない。」ということの問題視し、日本の牧師のほうでは、「欧米の宣教師が、日本に合わない宣教、日本の文化を異教であると一方的に押し付けたから。」という問題を取り上げています。どちらも、真実を含むでしょう。けれども、このような原因探しの中で、私の魂は押しつぶされそうになりました。「なんで、私たちが自分たちに鞭を打っているのだろうか？」と思ったのです。本質的なことを失っているのではないか？それは、「神は、何らかの理由で、このようにされている。」という御心です。主がこのようにされているという、主権であります。そして主が、ご自分の栄光のためにこのようにされているという認識です。

## 2B 滅んでいない憐れみ 21-45

エレミヤの落ち込みは、こんなものではなかったでしょう。けれども、ここからエレミヤの回復が始まります。

## 1C 待ち望み 21-39

3:21 私はこれを思い返す。それゆえ、私は待ち望む。3:22 私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。3:23 それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。3:24 主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。

午前礼拝でお話したとおりです。主がこのようにされているということは、主は良い方なのだから、ここに憐れみが既にあるのだという希望なのです。そして、自分が今ここにいること、滅ぼし尽くされていないこと自体が神の恵みです。そして実は、その憐れみは尽きぬことなく、日毎に新しくされています。私が多くのことを望んだら、気が沈むかもしれませんが、私が受ける分は主ご自身です。そこにあって、主を待ち望むのです。

3:25 主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めたましいに。3:26 主の救いを黙って待つのは良い。3:27 人が、若い時に、くびきを負うのは良い。3:28 それを負わされたなら、ひとり黙ってすわっているがよい。3:29 口をちりにつけよ。もしや希望があるかもしれない。

主は慈しみ深い方、良い方であることを知って、主を待ち望むことはとても魂によいことです。26節の、「黙って」主の救いを待つことは大事です。これは寡黙になることではありません。何で、今の状況はこうなっているのだと焦ったり、文句を言ったり、良かったりするのではなく、ここで主が何か良いことを行なっておられるのだと信じて、待っていくのです。そして、「若い時」の例を挙げています。若さは、そういった強さ、生き生きとした姿が特徴ですが、けれども実は黙って待つということを学んでいく必要のある人々であります。

3:30 自分を打つ者に頬を与え、十分そしりを受けよ。3:31 主は、いつまでも見放してはおられない。3:32 たとい悩みを受けても、主は、その豊かな恵みによって、あわれんでくださる。

奴隷状態になっても、その後にある神の幸い、豊かな憐れみを思って、それでそこで受ける仕打ちに甘んじなさいという勧めであります。この時は、ユダヤ人は自分たちの罪ゆえにこのような仕打ちを受けて行くのですが、実は、私たちキリスト者が罪でなくとも、いや善を行なっているがゆえに、このような仕打ちを受けることを、新約聖書では教えています。そして、イエス様は、「あなたの右の頬を打つような者には、左の頬をも向けなさい。(マタイ 5:39)」と言われました。そして主ご自身が、受難の時にこのように頬を打たれ、誹りを受けられました。

3:33 主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない。3:34 地上のすべての捕われ人を足の下に踏みにじり、3:35 人の権利を、いと高き方の前で曲げ、3:36 人がそのさばきをゆがめることを、主は見っておられないだろうか。3:37 主が命じたのでなければ、だれがこのようなことを語り、このようなことを起こしえようか。3:38 わざわいも幸いも、いと高き方の御口から出るのではないか。3:39 生きている人間は、なぜつぶやくのか。自分自身の罪のためにか。

非常に大事な箇所です。33節は、主の民とされている者には苦しみは、必ず神のはっきりとした御心があるのだということです。そして 34-36 節は、主が必ず正しく報いてくださるという信仰です。(誹謗中傷を受けた知人の牧師さんが、この信仰を告白しておられました。)そして 37-38 節は、再び大事な、神の主権であります。幸いだけでなく、災いも神の口から出ています。だからこそ、希望があるのです。主がこうしておられるのだから、主がこれから良くしてくださるのです。そして、悪に対しては正しく裁いてくださいます。

だから、39節、結論は「呟くのであれば、自分自身の罪だけにしなさい。」ということなのです。私たちは多くのことを考えています。けれども、することは多くありません、イエス様の心を知ること。そしてこの方に付いていくことです。日々の歩みの中で、重荷を背負わずに、頸木の軽いイエス様

の頸木を負って、イエス様から学ぶのです。

### 2C 尋ね調べ 40-45

3:40 私たちの道を尋ね調べて、主のみもとに立ち返ろう。3:41 私たちの手をも心をも天におられる神に向けて上げよう。3:42 「私たちはそむいて逆らいました。あなたは私たちを赦してくださいませんでした。3:43 あなたは、御怒りを身にまとい、私たちを追い、容赦なく殺されました。3:44 あなたは雲を身にまとい、私たちの祈りをさえぎり、3:45 私たちを国々の民の間で、あくたとし、いとわれる者とされました。」

39節の主からの呼びかけに対して、応答しているのが今、読んだ箇所です。40節の言葉が、大事です。「調べ尋ねる」ということです。私たちは表面的に罪というものを取り扱っているかもしれませんが、自分はここが罪であると思っるところが実はそうではなく、主は自由にやりなさいと言われていたかもしれない。その反対に、自分は当たり前だと思っていたこと、いや、正しいと思っていたことが、実は主の前では罪であったということがあります。そして何よりも、イエス様の心と一つになっていることが大事なのであって、自分自身の義を立てることは御心に反することです。このように、「調べ尋ねる」という行為が必要です。自分自身を裁き、自己吟味をすることです。

そして42節以降から罪の告白をしています。ここはしっかりと読む必要があります。初めに、「私たちはそむいて逆らいました。」と言っています。そして背いて逆らったままでいたので、主は罪の赦しを与えることはできませんでした。そして、背いて逆らったままでいたので、彼らの救いの祈りを遮られました。そして国々の中で、厭われるようにされました。このことを彼らは悟ったのです。それまでは、非常に表面的なところで、感情面で悔い改めているようにしていたのです。だから、エジプトにまで移住した時に、彼らは、天の女王にいけにえを捧げて、それをやめたから災いが来たのだと言っていたのでした。

### 3B 敵からの救い 46-66

#### 1C 深い穴からの叫び 46-58

3:46 私たちの敵はみな、私たちに向かって口を大きく開き、3:47 恐れと穴、荒廃と破滅が私たちのものになった。3:48 私の民の娘の破滅のために、私の目から涙が川のように流れ、3:49 私の目は絶えず涙を流して、やむことなく、3:50 主が天から見おろして、顧みてくださる時まで続く。3:51 私の目は私の町のすべての娘を見て、この心を苦しめる。

これはバビロンが今、エルサレムを破壊しようとしてくる姿を見て、エレミヤが涙を流して嘆いている姿であります。嘆き、心が苦しいのですが、「主が天から見おろして、顧みてくださる時まで続く」と言って、これがいつまでも続くのではなく、主がよしとされる時まで続くことを知っていました。

3:52 わけもないのに、私の敵となった者たちは、鳥をねらうように、私をつねらった。3:53 彼ら



は私を穴に入れて殺そうとし、私の上に石を投げつけた。3:54 水は私の頭の上にあふれ、私は「もう絶望だ。」と言った。3:55 「主よ。私は深い穴から御名を呼びました。3:56 あなたは私の声を聞かれました。救いを求める私の叫びに耳を閉じないでください。3:57 私があなたに呼ばれるとき、あなたは近づいて、『恐れるな。』と仰せられました。3:58 主よ。あなたは、私のたましいの訴えを弁護して、私のいのちを贖ってくださいました。

46 節まで「私たち」とあり、ユダヤ人が悔い改めの祈りを捧げていたところから、48 節から、「私」とエレミヤ本人の祈りへと移っていました。バビロンが攻めてくるにあたって、52 節以降には自分自身が死にかけるほどの迫害を受けたことを話しています。彼は穴に入れられて、宦官エベデ・メレクが勇気をもって助けなければ死んでいたところでした。その時にエレミヤは、主に対して救いを祈っていたようです。

### 2C 敵への報復 59-66

3:59 主よ。あなたは、私がしいたげられるのをご覧になりました。どうか、私の訴えを正しくさばいてください。3:60 あなたは、私に対する彼らの復讐と、たくらみとをことごとくご覧になりました。3:61 主よ。あなたは、私に対する彼らのそしりとすべてのたくらみとを聞かれました。3:62 私の敵のくちびると彼らのつぶやきが、一日中、私に向けられています。3:63 彼らの起き伏しに目を留めてください。私は彼らのからかいの歌となっています。3:64 主よ。彼らの手のわざに応じて、彼らに報復し、3:65 横着な心を彼らに与え、彼らに、あなたののろいを下してください。3:66 主よ。御怒りをもって彼らを追い、天の下から彼らを根絶やしにしてください。」

エレミヤが、これら自分を迫害した敵どもに対して、復讐を祈っているところです。以前から学んでいます。これは仕返しをしたいからではなく、むしろ神に復讐を任せるためであり、自分が復讐しないためであります。

そして、ここではもしかしたら、エレミヤがエルサレムに代わって、敵について祈っていることも含まれているかもしれません。エルサレムがエレミヤと同じようにバビロンによって迫害されます。悔い改めて、神に立ち返った者たちが、それでもバビロンに虐げられている時に、バビロンへの復習の言葉を祈ることができます。主はこれらの祈りを聞かれます。エレミヤが祈ったときは、彼を迫害した者どもは、ネブカデネザルによってことごとく処刑されました。そして、捕え移したバビロンも、七十年後にはメディア・ペルシャによって滅ぼされたのです。しかも、永遠の滅びが宣言されています。

### 2A エルサレムの零落 4

ここまでが、一つの区切りでありましょう。1 章において、エルサレムの没落の姿、2 章において、エルサレムを自分のことのようにして祈り、3 章で主の慈しみをその中でも知る。そして 4 章と 5 章ですが、改めてエルサレムがどのように没落してしまったのか、その悲惨さがかつての栄華との対

比によって語っていきます。このことで、罪から来るものが何なのかをはっきりとさせています。

#### 1B 飢え衰え 1-16

#### 1C 一般の民 1-12

4:1 ああ、金は曇り、美しい黄金は色を変え、聖なる石は、あらゆる道ばたに投げ出されている。  
4:2 純金で値踏みされる高価なシオンの子らは、ああ、陶器師の手で作られた土のつぼのようにみなされている。  
4:3 ジャッカルさえも乳房をあらわし、その子に乳を飲ませるのに、私の民の娘は、荒野のだちょうのように無慈悲になった。  
4:4 乳飲み子の舌は渴いて上あごにつき、幼子たちがパンを求めても、それを裂いて彼らにやる者もない。  
4:5 ごちそうを食べていた者は道ばたでおれ、紅の衣で育てられた者は、堆肥をかき集めるようになった。

今、エルサレムに行っても夕映えによって黄金に輝いて見えますが、当時のソロモンによって建てられたエルサレムは神殿に使われていた金によって、燦々と輝いていたことでしょう。ところが、バビロンによって投げ出され、持ち去られています。

そして3節から、いかに飢餓状態が広がっているかを示しています。だちょうは本当に奇妙な動物です。一般の動物にある母性本能が一切ありません。産んで、砂漠の暑さの中で孵化するのですが、唯一の気遣いは、他に孵化しそうな卵のそばに新しい卵を産み落とすことです。孵化した雛が、その卵を最初の食べ物にするためです。そして赤ん坊や幼子が食べられない状態、また、ご馳走を食べていた者が、なんと堆肥からまだ食べることのできるものを探している有様です。

4:6 私の民の娘の咎は、人手によらず、たちまちくつがえされたソドムの罪より大きい。  
4:7 そのナジル人は雪よりもきよく、乳よりも白かった。そのからだは、紅真珠より赤く、その姿はサファイヤのようであった。  
4:8 しかし、彼らの顔は、すすよりも黒くなり、道ばたでも見分けがつかない。彼らの皮膚は干からびて骨につき、かわいて枯れ木のようになった。

エルサレムにおける悲惨さを、ソドムが受けた火による裁きよりも酷いことを言い表しています。火による裁きであれば、一瞬にして死んでしまいます。けれども、すぐに死んだほうがまだましと言えるほどの悲惨を通りました。ここの「ナジル人」は比喩です。彼は必ずしも、雪のように白が白いわけではありません。けれども、ナジル人は神に捧げられた人、聖別された人ということで、ここでの表現は純潔を表しているのだと思います。ところが今は、飢餓によって肌が黒くなっています。もう飢餓状態で、顔がそうなっているのです。

4:9 剣で殺される者は、餓え死にする者よりも、しあわせであった。彼らは、畑の実りがないので、やせ衰えて死んで行く。  
4:10 私の民の娘の破滅のとき、あわれみ深い女たちさえ、自分の手で自分の子どもを煮て、自分たちの食物とした。

その飢餓の悲惨さの極めつけは、母親が自分の子どもを煮て、食べるということにあります。最も子どもを愛し、その子のために命を捧げる気持ちこそ、母性というものです。それが全て破壊されている状態、人が獣のような心になり、人間性が完全に失われてしまっている状態です。これは、剣で殺されるよりももっと悲惨です。そして主はこのことを、モーセを通して予め語っておられたのでした。「申命 28:56-57 あなたがたのうちの、優しく、上品な女で、あまりにも上品で優しいために足の裏を地面につけようとしぬ者が、自分の愛する夫や、息子や、娘に、物惜しみをし、自分の足の間から出た後産や、自分が産んだ子どもさえ、何もかも欠乏しているので、ひそかに、それを食べるであろう。あなたの町囲みのうち、包囲と、敵がもたらした窮乏との中にあるからである。」

4:11 主は憤りを尽くして燃える怒りを注ぎ出し、シオンに火をつけられたので、火はその礎までも焼き尽くした。4:12 地の王たちも、世に住むすべての者も、仇や敵がエルサレムの門に、はいつて来ようとは信じなかった。

当時の世界において、門というものはとても死活的なものでした。イスラエル旅行に行った時に、オスマン帝国時代に作られたエルサレムの町の門の説明をしていただきましたが、イエス様が十字架の判決を受けたローマ総督官邸のそばに、ステパノ門があります。それが鉄製で頑丈でした。そして日没になると閉めますが、その後人がやって来ても絶対に開けないのだそうです。つまり、それだけ外敵が来ることを意味しており、エルサレムの門に仇や敵が入ってくるということは、考えられないことでした。今でしたら、国会議事堂にテロ集団の一味が入ってきて、牛耳ってしまったというような衝撃でしょう。

### 2C 預言者と祭司の罪 13-16

4:13 これはその預言者たちの罪、祭司たちの咎のためである。彼らとその町のただ中で、正しい人の血を流したからだ。4:14 彼らは血に汚れ、盲人のようにちまたをさまよひ、だれも彼らの着物に触れようとしなかった。4:15 「あっちへ行け。汚れた者。」と人々は彼らに叫ぶ。「あっちへ行け。あっちへ行け。さわらぬ。」彼らは、立ち去って、なおもさまよひ歩く。諸国の民の中で人々は言う。「彼らはもう立ち寄ってはならない。」4:16 主ご自身も彼らを散らし、もう彼らに目を留めなかった。祭司たちも尊ばれず、長老たちも敬われなかった。

全ての罪の中で、預言者たちと祭司たちの罪と咎は筆頭にあげられます。なぜなら、神の真理について知ることのできるの、彼らが神からの言葉を受けて、それで初めて知ることができるからです。また律法を説き明かしてそれで知ることができます。ところがその土台を示さなかった。ゆえに、牧者や説教者、伝道者の罪は重いです。また、キリスト者がそれぞれ責任を負っています。そして、「正しい人の血を流した」と言っていますが、墮落した預言者と祭司はこのことを行ないません。新約の時代、まさに主イエスご自身を宗教指導者が行ないました。それゆえ、彼らは忌み嫌われます。これも悲惨です。御言葉を取り次ぐべき者が、全く捨てられているのですから、だれも



御言葉を聞くことができなくなります。

## 2B 滅び 17-22

4:17 それに、私たちの目は、衰え果てた。助けを求めたが、むなしかった。私たちは見張り所で、見張った。救いをもたらさない国の来るのを。4:18 私たちの歩みはつけねられて、私たちは広場を歩くことができなかった。私たちの終わりは近づいた。私たちの日は満ちた。私たちの終わりが来たからだ。4:19 私たちを追う者は、大空の鷲よりも速く、山々の上まで追い迫り、荒野で私たちを待ち伏せた。4:20 私たちの鼻の息である者、主に油そそがれた者までも彼らの落とし穴で捕えられた。「この者のおかげで、諸国の民の中でも私たちは生きのびる。」と私たちが言った者なのに。

祭司と預言者が捨てられている中で、最後にゼデキヤが捕え移されるまでの状況を話しています。初めにエジプトが来て助けようとしているのですが、その救いは見事に裏切られました。それでエルサレムの終わりが近づき、バビロン軍が山々にまで、荒野にまでおい迫っています。そして、最後の命、つまり、油注がれた王ゼデキヤが捕えられました。彼がバビロンに降伏していれば、少なくとも命だけはユダヤ人は助かったはずなのですが、それに背いたのです。

4:21 ウツの地に住むエドムの娘よ。楽しみ喜べ。だが、あなたにも杯は巡って来る。あなたも酔って裸になる。4:22 シオンの娘。あなたの刑罰は果たされた。主はもう、あなたを捕え移さない。エドムの娘。主はあなたの咎を罰する。主はあなたの不義をあばく。

エドムはユダと同盟を結んでいました。ところが、バビロンによってエルサレムが滅んだ時に、そこに来て、その破壊を喜んだのです。それほどエドムは偏屈であり、イスラエルに対して憎しみを抱いていました。それゆえ、主は、エドムを完全に滅ぼされます。そしてエドムは滅ぼされますが、エルサレムは後に回復するのです。選ばれた者を妬み、憎むということが、いかに愚かなことであるのか、自分自身を滅ぼしてしまうことであり、その逆に恨まれたほうは生き残るのです。

## 3A 回復への叫び 5

そして、エレミヤのこの祈りに呼応して、イスラエルの残された者たちの罪の告白の祈りが 5 章に書いてあります。

### 1B 他国人の虐げ 1-18

#### 1C 失われた権利 1-10

5:1 主よ。私たちに起こったことを思い出してください。私たちのそしりに目を留めてください。顧みてください。5:2 私たちの相続地は他国人の手に渡り、私たちの家もよそ者の手に渡りました。5:3 私たちは父親のないみなしごとなり、私たちの母はやもめになりました。5:4 私たちは自分たちの水を、金を払って飲み、自分たちのたきぎも、代価を払って手に入れなければなりません。

彼らがバビロンに捕え移された後のことを考えて、歌っています。彼らが相続地を持っていた時に当然持っていた権利が剥奪されています。それをみなしご、やもめとたとえ、また自分たちで働いたものが自分たちのものになっていない状態です。

5:5 私たちはくびきを負って、追い立てられ、疲れ果てても、休むことができません。5:6 私たちは足りるだけの食物を得ようと、エジプトやアッシリヤに手を伸ばしました。5:7 私たちの先祖は罪を犯しました。彼らはもういません。彼らの咎を私たちが背負いました。5:8 奴隷たちが私たちを支配し、だれも彼らの手から私たちを救い出してくれません。5:9 私たちは、荒野に剣があるために、いのちがけで自分の食物を得なければなりません。5:10 私たちの皮膚は、飢えの苦痛のために、かまどのように熱くなりました。

働き、また食べ物もなく、エジプトやアッシリヤ地方という、はるか彼方まで歩き、荒野においては強盗などが剣を持っているので、命がけで食料を得なければいけません。皮膚は、先ほどは上で黒ずんでいてありましたが、そこまでは行きませんが、働き過ぎで熱くなっています。そして大事なものは、そうになっているのは偏に、「私たちの先祖は罪を犯しました。」ということです。バビロン捕囚からしばらく経ってのことを先んじて歌ったのだと思われます。先祖たちの罪がそうさせているのだと言っています。

#### 2C 奴隷生活 11-18

5:11 女たちはシオンで、おとめたちはユダの町々で、はずかしめられました。5:12 首長たちは彼らの手でつるされ、長老たちも尊ばれませんでした。5:13 若い男たちはひき臼をひかされ、幼い者たちはたきぎを背負ってよろめき、5:14 年寄りたちは、城門に集まるのをやめ、若い男たちは、楽器を鳴らすのをやめました。5:15 私たちの心から、喜びは消え、踊りは喪に変わり、5:16 私たちの頭から冠も落ちました。ああ、私たちにわざわいあれ。私たちが罪を犯したからです。5:17 私たちの心が病んでいるのはこのためです。私たちの目が暗くなったのもこのためです。5:18 シオンの山は荒れ果て、狐がそこを歩き回っているからです。

エルサレムの中で何が起こったのかを思い出しています。女は恥ずかしめられ、首長たちは殺され、若い者も奴隷のような酷使を受け、幼子、年寄り、若い男、みな日常の活動をすることができないようにされました。そして自分の心から喜びがない、冠のような尊厳がなくなっています。そして、それが偏に、「ああ、私たちにわざわいあれ。私たちが罪を犯したからです。」ということなのです。そしてシオンが廃墟となっていることを話しています。十分に、これでもかというほど罪の告白をしています。

#### 2B とこしえの御座 19-22

5:19 しかし、主よ。あなたはとこしえに御座に着き、あなたの御座は代々に続きます。

ここが、彼らの告白の核になっています。彼らが酷い仕打ちを受け、神に約束されたこととは異なることが起こっていましたが、彼らは、「いや、むしろ私たちが罪を犯し続けていたら、このようになると主が言われたことがそのまま起こっていたのだ。」として、主が真実な方であることを証していました。しかしながら、彼らの魂はもちろん呻いています。このような悲惨な状態にいて、主が本当におられるのか？主がどこかに行かれて、見捨ててしまわれたのではないか？と思っているのです。

それが、ここでの告白です。「主よ。あなたはとこしえに御座に着き、あなたの御座は代々に続きます。」主がやはり、永遠の御座から支配しておられるということです。永遠ですから、時代を支配しています。今の時代は一時的です。いつか過ぎ去ります。しかし主はそれでも支配しておられます。御座を持っておられます。私たちが今、自分たちにできないことがある。何が起きているかわからない。そんな困難や試練がある時、それでも主が御座におられると信じます。

5:20 なぜ、いつまでも、私たちを忘れておられるのですか。私たちを長い間、捨てられるのですか。5:21 主よ。あなたのみもとに帰らせてください。私たちは帰りたいのです。私たちの日を昔のように新しくしてください。5:22 それとも、あなたはほんとうに、私たちを退けられるのですか。きわみまで私たちを怒られるのですか。

ここでは切なる、回復への願いです。バビロンで捕囚の民となってから、時が経っています。エルサレムに、昔のエルサレムに帰りたいと言っています。そしてやはり、その時が近くにないことを嘆いて、いつまでも退けられるのですか、と話しています。

これが罪の悔い改めでありましょう。罪を犯したら、私たちが失うことが非常に多いです。その結果をずっと負わなければいけません。その中で苦しみ、悩みます。しかしこの残りの民、また彼らのことを思って代表して祈ったエレミヤの祈りは、それでも主の前に出て行くという姿勢を示しました。そこには、主の慈しみがあるからです。主が何かをしておられるのです。だから、主の前に出ます。そして回復を期待するのです。